海外情報

海外情報２０１６～２０１７

―アジアに見る新しい電子オルガン音楽の動き―

阿方 俊

アジアの音楽大学で今、日本では想像できない電子オルガン音楽の新しいうねりが起こりつつある。以下の催しは、昨年１０月から２０１７年８月、シンガポール、台湾、中国の高等教育機関で行われたものである。日本でも実践可能なものであると思われるので紹介したい。

① １ヶ月のアンサンブルレッスンでピアノ協奏曲　シンガポール国立音楽院エレクトーンオーケストラ

② 擬音真芸（バーチャル音による真の芸術）コンサート　台湾・東海大学電子鍵盤管弦楽団

③ 中国電子オルガン専攻開設校１１９校による「全国音楽院校電子オルガン教育連盟」　上海音楽学院

キーワード：エレクトーンオーケストラ　擬音真芸　全国音楽院校電子オルガン教育連盟

1．シンガポール国立音楽院「エレクトーンオーケストラ」コンサート

昨年 10 月、シンガポール国立音楽院「エレクトーンオーケストラ(10 人のエレクトーンアンサンブル)」がモーツァルトのピアノコンチェルト第 24 番を演奏した。このような演奏形態は日本でも珍しくないが、エレクトーン経験未経験のピアの科学生が１ヶ月のトレーニングでステージに上がったということは聞いたことがない。以下、コンサート概要とエレクトーンオーケストラ結成までの経緯。

■コンサート概要

と　き：2016 年 10 月 29 日 19:00
ところ：シンガポール国立音楽院ホール
主　催：シンガポール国立音楽院
曲　目：モーツァルトのピアノ協奏曲第 24 番ハ短調 K.491 全楽章
ピアノ：トーマス・ヘクト（Thomas HECHT、アメリカ人ピアニスト、同音楽院ピアノ科教授）
指　揮：郭宗愷（KUO Tzuong-Kai、指揮者、台湾・東海大学ピアノ科名誉教授、博士）
演　奏：国立音楽院「エレクトーンオーケストラ」シンガポール国立音楽院の学生８名に台湾・東海大学の学生２名がゲストとして参加

特長として次の３点が挙げられる。

・郭宗愷スタイルのスコアリーディング奏法
エレクトーン未経験のピアノ科の学生８名が、スコアリーディング奏法による１ヶ月５回のトレーニングでピアノコンチェルトを演奏。これは Dr.郭宗愷が 1990 年代に日本でのエレクトーン音楽と指導体験を基に台湾で完成した演奏・指導スタイル。次ページ写真参照。

・ピアノ科主任教授トーマス・ヘクト自らの演奏
彼は、欧米、アジア、オセアニアの世界各地のオーケストラとピアノコンチェルトを協演しているピアニスト。このオーケストラをつくり自ら指導し、かつソロをしたきっかけは、彼が東海大学で郭宗愷指揮の電子鍵盤管弦楽団でピアノコンチェルトを協演したことにある。

・エレクトーン８台の購入と商品名を冠したオーケストラの結成
ピアノコンチェルトやオペラ公演でエレクトーンとと出会ってその有用性を高く評価する人は数多くいるが、それを購入にまで結びつけ、自らが指導し、共演するところまでやってのけた人はトーマス・ヘクト以外にいないのではなかろうか。

■コンサート実現までの経緯

このコンサートが実現したきっかけは、彼が台湾の東海大学で郭宗愷指揮による電子鍵盤管弦楽団（電子

オルガン 10 台によるアンサンブル）とピアノコンチェルトを数年前に協演したことに遡る。

彼から届いた７月２０日付けメールに出会いから今日までのことが記されている。

その要旨は、「シンガポール国立音楽院のトーマス・ヘクトから非常にエクサイティングな情報を受け取ったので、あなたとシェアしたい。私は過去数年間、彼とブラームスのピアノコンチェルト第２番、ベートーヴェンの第４番、モーツァルトの第 24 番とラベルのピアノコンチェルトを協演。その結果、彼は私達の電子オルガンオーケストラに教育的可能性を強く感じて彼の学校でこのようなオーケストラを作りたいと決心した。シンガポール音楽院はすでに８台のエレクトーンを注文し、私と学生２名が 2016 年 10 月 26 日から始まる同音楽院の一大イベントであるシンポジウムに招待された。同時に学生に電子オルガンアンサンブルを彼自身がトレーニングしたいので指導のノウハウを教えて欲しい」というもの。

シンガポール国立音楽院ホールでのリハ風景

このような短時間のレッスンでエレクトーン未経験者がコンチェルトを演奏できたポイントは、ブラスを除いて「一人一楽器担当」、「シンプルなレジストレーション」による「スコアリーディング奏法」にある。

エレクトーンオーケストラメンバーリスト

1st Vl. Wang Jen-Chun（台湾）
2nd Vl. Nguyen Le Binh Anh（ベトナム）
Viola. Teh Jiexiang（シンガポール）
Cel & Bass. D. Kongviwatanakul（タイ）
Flute. Muse Ye（ニュージランド）
Oboe. Luong Khanh Nhi（ベトナム）
Clarinet. Shayna Yap（シンガポール
Bassoon. Arianna Chiew（マレーシア）
Horn. Stephen Lim（シンガポール）
Brass &·Timp. Chen Wei-Yuan（台湾）
＊台湾の２名はゲスト。ホルン担当者を除きピアノ科学部生

このリストに見られるようにシンガポール音楽院の学生は、日本の音楽大学とは比べることができないほど国際色豊かである。このエレクトーンオーケストラの東南アジアを中心とした波及を期待したい。

写真は記念撮影　10 名の演奏者に加え、右から 2 人目：郭宗愷、３人目：筆者、４人目：トーマス・ヘクト

２．疑音真芸（バーチャル音の真の芸術）コンサート

台湾の東海大学では、郭宗愷（KUO Tzuong-Kai、博士）が四半世紀前に立ち上げた東海大学電子鍵盤管弦楽団という名前の電子オルガンアンサンブルが盛んに活躍している。その影響は、国内に留まらず前述のシンガポールや今まで香港、台中、東京、広州で開催されてきたアペカ（アジア・パシフィック電子キーボード協会）の「サマーミュージックキャンプ」など広く注目されている。

この電子鍵盤管弦楽団は学内で東海大学オーケストラと対をなす団体で、特にコンチェルトやオペラでは大学院修了コンサートからトーマス・ヘクトなど海外からの招聘音楽家に至る数多くのコンサートや公演をこなしている。またこの楽団は通常のカレッジ・オーケストラの演奏場所を超えており、日本の NHK やサントリーホールに匹敵する国家音楽庁大ホールなどでも演奏している。以下、その活動の一端である。

この楽団は過去 20 年に渡り、擬音真芸（バーチャル・サウンドによる真の芸術）タイトルのコンサートを毎年行っている。今年は４月 30 日、台中の中山堂ホール（1625 席）で、2017「擬音真芸」New Musicians in Tunghai University というタイトルで開催された。

2017 擬音真藝
New Musicians in Tunghai University

演奏曲目は、

・ブランデンブルグ協奏曲第５番(フルート、ヴァイオリン、チェロ、ハープシコード奏者との協演)
・チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲
・ラフマニノフのピアノ協奏曲第３番

ここでの演奏者は、アメリカの大学でドクターを取得した７名の新進音楽家で、新年度から東海大学の教員となる若手グループ。共演は、郭宗愷指揮の東海大学電子鍵盤管弦楽団。

またこの楽団は、３月 21 日、台中の中興堂音楽ホール（1200 席）で、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第４番とガーシュインのラプソディ in ブルーを、2017「擬音真芸」の１週間前の４月 23 日に、ラフマニノフ　ピアノ協奏曲第３番を新進のピアニスト張凱閔と彼の指揮で協演している。

写真：10 台のエレクトーンによる郭宗愷スタイルの楽器配置をよく見ることができる。

写真：満員の聴衆の拍手に応える張凱閔（ピアノ）

現在、郭宗愷指揮によるこの楽団は、カレッジオーケストラの域を超えて活躍している電子オルガンアンサンブルといえる。

３．中国「全国音学院校電子オルガン教育連盟」発足

タイトルの音楽院校（中国語）は、大会要項の参加校からみると音楽大学から教育大学音楽科などを広く含む音楽大学・学校という意味で使用されている。

学会や研究会のような個人をベースとした集まりはよく目にするものの、楽器（ここでは電子オルガン）別の学校をベースにした連盟や連合といったものはめずらしい。

昨年 11 月 17～19 日、上海音楽学院に中国の各地域を代表する音楽学院９校と音楽院など 110 校が参加して「全国電子オルガン教育連盟」が設立された。

音楽学院９校と音楽院 110 校歓迎の立て看板

中国でいう「音楽学院」と「学院」の名前の付く学校は、各地域を代表する位置づけの音楽大学を意味する。ここでは、上海、天津、中国、四川、西安、瀋陽、武漢、星海、浙江の９つの音楽学院を指す。

日本と中国の電子オルガン科開設校についての大きな違いは、中国では、東京芸術大学や桐朋学園大学クラスの音楽大学と東京学芸大学のような教育系大学に電子オルガン科が設置されていることである。このことは電子オルガン音楽や電子オルガン教育の最高レベルの専門教育分野が最高学府で行われていることを意味する。

中国の電子オルガン界の現状をみると、日本に比べて歴史が短いため中国ならではの課題が見受けられなくもないが、日本と違ったバックグラウンドの中で将来を見据えて設立された教育連盟のもつ意義は深い。

中国と一口にいっても日本の国土面積の２５倍もあるため、参加するにも国際大会に参加するような大変さと同時にスケールの大きさを随所にみることができる。初日の受付が 08:00～17:00 となっているが、これは参加者が飛行機や汽車を乗りついでやってくるためで、人によっては往復４～５日を費やすことになる。

＜大会スケジュール＞

と　き：2016 年 11 月 17～19 日
ところ：上海音楽学院
主　催：教育連盟設立大会実行委員会
参加校：音楽学院 9 校および音楽院 110 校

＜第 1 日＞
08:00～17:00　受付
19:00　式典、音楽学院祝典コンサート
21:30　歓迎ビュッフェ

＜第 2 日＞
13:00　全国音楽院コンサート（1）
15:30　全国音楽院コンサート（2）
19:15　全国音楽院コンサート（3）

＜第 3 日＞
08:30　新教材展示会
13:00　音楽学院 9 校サミットフォーラム
15:00～18:00　全国音楽院代表討論会
19:00　閉幕ビュッフェ

式典や懇親会以外の内容は、大きく 3 つのものが行われた。

■コンサート

コンサートは 2 日に渡って開かれ、初日は音楽学院 9 校による祝典コンサートで、2 日目は音楽院などを含む 31 校によるコンサートが行われたが、出演の団体数だけを見ると怖気付いてしまう。

写真：星海音楽学院のアンサンブル

しかし、音楽内容がクラシックからジャズまで、演奏形態がソロ、デュエットからハイブリッドアンサンブルまでと電子オルガンを使ったいろいろな演奏形態の披露となり、どれも素晴らしいものであった。

コンサートの最初を飾った星海音楽学院のアンサンブル（写真：左上）の楽器編成は、エレクトーン 2 台、ヴィブラフォン、二胡、ギター、ベース、パーカッションと変則的楽器編成でオリジナル曲を披露。

また使用された電子オルガンがヤマハ、リングウエイ、ハモンド・オルガンといったメーカーに縛られない楽器が用いられたことも教育連盟ならではのもので、長丁場ではあったが、エレクトーンコンクールのソロ演奏の連続と違って、興味を持続して聴けたことは不思議に思えた。

照明の過多や音の出口としての PA は、中国だけの問題ではなく日本も同様な面があるが、今後の課題として考えて行く必要がある。

■新教材展示会

中国版の教材を中心とした教材展示会。出席者は、自由に取って閲覧できるようになっていた。学会のポスターセッションや楽譜出版社の曲集や教材の大々的な展示即売会ものを想像していただけると一番近い。

■サミットフォーラム、音楽院代表討論会

音楽学院を代表する 9 人の先生によるサミットフォーラムでは、現状報告の中で、四川音楽学院の募集人員の数倍の応募者があるとの発言に大きな拍手があったのが印象的であった。高度経済成長の中国も学生募集は徐々に厳しさを増していくと思われる。

この教育連盟設立大会には中国全土から 300 名を超す参加者が集まり、演奏や討論に熱心に参加するエネルギーに圧倒された。世界ではじめてとなる、音楽大学・学校の関係者による教育連盟の発展が、将来の中国を軸とした電子オルガン音楽・教育の運命を左右するものであることは間違いないだろう。

これら 3 つの電子オルガン音楽のアジア諸国における動きは、どれも日本では見られない動きであり、更なる電子オルガン音楽と教育の分野が前進していきつつあることを実感させられる大きなうねりである。

写真：1995 年発足時の中国電子オルガン学会の王梅貞（元会長）、芦小鴎（会長）、王曉蓮（副会長）など重鎮が勢ぞろい

（平成音楽大学　あがた すぐる）